

## 第二部

### 第一章 京言葉における「あいさつ表現」

#### はじめに

第一部においては、藤原与一氏の方言の待遇表現分類法を参考にして、京言葉の待遇表現の記述を試みてきた。その記述の少ない項目の充実を、今後の課題としたい。

第二部においては、京言葉のあいさつ表現について更に具体例を挙げて考えていく。

尚、筆者の現在までの京言葉に関する口頭発表や拙稿に対して、調査対象を老年層から若年層に広げる気がないのかと問う人が少なくなかった。ために、老年層と若年層のあいさつ表現を比較する方法をとった拙稿を發表しているが、手法に問題があると判断し、ここでは記述を割愛した。

筆者は、京都という土地柄においてあいさつ表現が重視され育まれてきたという見通しをもっている。その見通しの妥当性を検討する立場から、あいさつ表現について先に触れた。

比較検討<sup>(註)</sup>抜きに、早計に京言葉のあいさつ表現の特色を云々できないのは、勿論のことである。

あいさつ表現の分類については、諸先学の論により多くのことを学んだが、本稿においては次のような考えのもとに整理を試みる。町家の人々の生活心情に近づく目的から、「家」を中心に据え、家庭内・訪問先の他家・偶然の出会いの場所というように場面を分けて、日常的なあいさつ表現の文型を捉えていく。「語選び」「言い回し選び」に注目する。あいさつ表現の記述は「待遇表現」の記述としての性格を有し、その意味で、第一部第二章との関連が深い。

記述の方法について、若干説明を加えておく。

被調査者には、自分が子供として育ってきた家庭環境を頭において考えてもらった。表現に対して説明が得られた場合には、その表現例の後に「説明」として示した。×印は、被調査者の中の明治三五年中京区生まれの女子の最終点検により、身近では言いも聞きもなかったという表現である。「<sup>庄七</sup>光」は、調査結果を整理したものを年下の「源氏物語」講読グループ「光葉会」の複数女子に検討してもらい、参考として注記したものである。「<sup>光</sup>」で特に否定しない表現は、その人達も使用するものである。( ) は、その形が現れることも現れないこともあることを示す。「<sup>一</sup>」は、併記した形のどれかを選んで用いることもあることを示す。片仮名表記とし、助詞「は」「へ」「を」は「ワ」「エ」「オ」と記し、長音は「ー」で記す。四つ仮名は、「ジ・ズ」で統一する。

### (一) 京言葉における家庭内のあいさつ表現

次の用例において、共通語訳を入れず、仮名にできるだけ漢字をあてるという方法を採用して意味を明らかにした。

家庭内で使用されたというあいさつ表現の表現形を記す。何回もの調査を経て得られた結果を、勿論何ら筆者の添

削を施すことなく示していく。その周辺に若干異なる幾通りかの表現の存在が推測される。挙げた表現例が定型化しきったものでないからである。これらのあいさつ表現が有する日常性のゆえであり、そういうものと考えておきたい。典型的な町家は、使用人も含めて大家族であった。表現は、丁寧度に応じて家庭内の多様な人間関係で使い分けられた。〈使用人↓家人〉〈子↓親〉〈妻↓夫〉〈嫁↓姑・舅〉の〈話し手↓聞き手〉の関係においては、〈目下↓目上〉の言葉つかいがなされる。

朝のあいさつ表現

- オハヨー。
  - オハヨーサン。
  - オハヨーサンドス。
  - オハヨーゴザイマス。
  - × オハヨーサンデゴザイマス。
- 〔<sup>光</sup>家庭内では、あまり言わない。客に対しては言う〕

外出の際のあいさつ表現

— 外出する側の表現 —

- 行(ッ)テサンジマス。

〔**説明** 次の世代では、「イッテキマス」と言う。子供は外出の際、「○○サンへ行ッテサンジマス」のように、必

「ず行き先を告げるように躡けられていた」

〔光〕「チョット行ッテサンジマス」等と子供の時「サンジマス」を使った人と使わなかった人と、人によって差の出る表現である」

○ 行ッテマイリマス。

○ チョット行ッテキマス。

× チョット行ッテクルエ。

〔光〕女子が使用する」

× チョット行ッテクルデ。

〔光〕男子が使用する」

「参<sup>マツ</sup>ジル」は謙譲の動詞で補助動詞としても用いられるが、使用する人と年齢層とが限られていて、一方で「参<sup>マツ</sup>ル」が用いられる。最終点検をお願いした中京区生まれの女子は、「テサンジマス」を耳にしたことはあるが、「テマイリマス」という形しか使用しないということである。

―見送る側の表現―

○ オハヨーオカ〔エ〕リ。

○ イツオカ〔エ〕リル？

○ オハヨーオカ〔エ〕リヤス。

○ イツゴロオカ〔エ〕リヤスヤロ？

〔説明〕外出する者が何時頃に帰宅するかは、確かめておかなければならない大切な事柄であった」

「オ帰<sup>カエ</sup>リル」という四段動詞の上二段活用化形の表現性に関しては、第一部第二章と第七部とに詳しく記した。軽い待遇の表現法であり(親↓子)等の人間関係で用いられ、けして目上に対して用いられない。

その他、見送る側の表現として、子供に対しては次のような表現がある程度の一般性を有していたようである。

○ 寄り道<sup>ヨリミチ</sup>セント、サツサト用済<sup>ヨクス</sup>マシテ帰<sup>カエ</sup>ツテクルノドッセ。

○ ヨー気<sup>キ</sup>ツケテ、コケンヨーニイッテオイデ。

「コケル」は、「ころぶ」の意である。尚、「行<sup>イ</sup>ットイナイ」は、あいさつ表現としては少しぞんざいである。

帰宅の際のあいさつ表現

— 帰宅する側の表現 —

○ タダイマ。

○ タダイマ帰<sup>カエ</sup>リマシタ。

○ エロー遅<sup>オソ</sup>ナリマシテ。

× 行<sup>イ</sup>(ツ) テサンジマシタ。

「エロー」は「エラク」のウ音便化した形で、「大変に」の意。

家ごとに驛の厳しさに差があるが、中京区生まれの女子(既出)の場合、学校から戻ると親の所に行き、カバンを横に置いてきちんと座り、手をつけて帰宅のあいさつ表現を述べたということである。長幼の序が確としていて、親不在の場合には兄弟を親の名代として、同じようにあいさつしたそうである。

—迎える側の表現—

○ オカ〔イ〕リ。

○ オカ〔エ〕リヤス。

○ 遅オシタナー。

× オ早イオカエリデ。

〔⊙〕「遅カッター」の後に、「何シテタンエ」「何シトイヤシタンエ」等が続く。

食事どきのあいさつ表現

—食事を知らせる際の表現—

○ モー御飯エ。

○ 御飯ドツセ。

○ 御飯ドツセ、早ーオ帰リヤツシヤ。

〔説明〕子供が戸外で遊んでいる時に、使用人等がこのように食事を知らせに来た。

〔⊙〕「御飯ドツセ、早ーオ帰リヤス」とも言う。

—食事前の表現—

○ イタダキマス。

○ 御馳走、ヨバレマス。

尚、正月三ヶ日雑煮を祝う際のあいさつ表現は、「イタダキマス」の意で次のように言う。

○ オイワイヤス。

食事を供する側のあいさつ表現については、次の通りである。

○ (ゴユックリ) オアガリヤス。

○ オアガリヤシトクレヤス。

○ メシアガットクレヤス。

× 才食ベヤス。

〔光〕「才食ベヤス」は言う人もあるが、あまり言わない〕

この他、次のように謙遜した表現もある。後者は、家人に対する表現としては、いささか改まりすぎる。客に対しては、よく用いる。

○ 何<sup>ナニ</sup>ニモオヘンケド、ドーズオアガリヤス。

○ ホンノオ口汚<sup>クチヨコ</sup>シドスケド、(ドーズオアガリヤス)。

― 食事後の表現 ―

○ (オーキニ) 御馳走<sup>ゴツツキ</sup>サン。

○ 御馳走<sup>ゴチソイサマ</sup>様デシタ。

〔光〕「(オーキニ) 御馳走<sup>ゴチソイ</sup>サン」「御馳走<sup>ゴチソイサマ</sup>様」も、用いる〕

食事を供した側は、これらのあいさつ表現に対して次のように答える。

○ ヨロシオアガリ。

○ ヨロシオアガリヤス。

尚、御膳のあげさげを依頼するのに次のような表現があるが、あまり通則的ではないようである。

- サゲトクレス。
- ヒートクレヤス。
- × アゲトクレヤス。

〔※〕「サゲトクレヤス」以外は用いない

その他食事どきの表現に関連して、正月雑煮を祝う前の新年のあいさつ表現を次に記しておく。

—— 家人から当主に対して ——

- オメデトーサンドス。オ世話ニナリマシタ。アリガトーサンドス。今年モ〔ヨロシユ〕オ願イシマス。

—— 当主から家人に対して ——

- オメデトーサン。
  - オメデトーサンドス。皆元氣デヨカッタネ。今年モアンジョー頼ミマッセ。
- 「アンジョー」は、「ヨロシク」の意である。

就寝の際のあいさつ表現

—— 双方の表現 ——

- オヤスミ。
- オヤスミヤス。



―寝る側の表現―

○ オ先<sup>サキ</sup>。

○ オ先<sup>サキ</sup>ーヤスマシテイタダキマス。

〔説明〕一家では「嫁<sup>ヨメ</sup>ハン」が最後に寝るので使用人もこのように言う」  
以上が、家庭内のあいさつ表現である。

## (二) 京言葉における他家訪問の際のあいさつ表現

ここで他家訪問の際のあいさつ表現を取り上げて、人と人、家と家とのつきあいが大切にされる社会において、あいさつ表現が重要な役割を果たすことを見ていきたい。被調査者の言によれば、子供の時から親の名代として他家を訪問する場合には所定の口上を述べることが求められ、実地の対人訓練をさせられたという。その際言い損じの言い直しは相手に対して失礼にあたらず、むしろ言葉づかいに気をつけていると認められたという。

他家訪問の際のあいさつ表現を、その順序性に従って記述していく。甲斐睦朗氏に「日本語のあいさつ言葉の順序性」(『日本語学』四巻八号)という論考があるが、本稿では、被調査者の言によってあいさつ表現の順序を考える。それは、訪問する側を中心にして考えると、おおむね次のようになる。

- ① 「ゴメンヤス」の類
- ② 「コンバンワ」の類
- ③ 「アッオスナー」の類

- ④ 「ゴブサタシテマス」の類  
用件に関わる「あいさつ表現」の類
- ⑤ 「オジャマシマシタ」の類
- ⑥ 「サイナラ」の類

このあいさつ表現の順序に関しては、必ずしも①～⑦が揃うとは限らず、①を略して②から入る等、簡略な形もありうる。  
①から順に、具体的な表現例を挙げて検討していく。

① 「ゴメンヤス」の類

①は、訪問を知らせるあいさつ表現の類である。

―訪問する側の表現―

- ゴメンヤス。
  - ゴメンヤシテオクレヤス。
  - コンニチワ。
- 〔説明〕「コンニチワ」の場合は、「コンニチワ、オハヨーサンドス」というように②の類と続けたり、②の類を略したりする」
- マイドオーキニ。
- 〔説明〕御用聞き等の商人が、使用する」
- オ頼<sup>カケモチ</sup>申シマス。

〔説明〕この表現の使用不使用は、人によって分かれる。医者宅を訪れる際に、このように言った  
 〔光〕「オ頼ミ申シマス」「オ頼ミシマス」とも言う

―迎える側の表現―

- ヨーオコシ。
- ヨーオコシヤス。
- (ヨー) オイデヤス。
- ヨーコソオイデヤシタ。
- ヨー来<sup>キ</sup>トクレヤシタ。
- 寒<sup>サム</sup>イノニ
- 遠<sup>トホ</sup>イ所<sup>トコロ</sup>オ
- 奥<sup>ウチ</sup>忙<sup>マシ</sup>シノニ
- ヨー来<sup>キ</sup>トクレヤシタナ。オオキニ(ハバカリサン)。
- マー部<sup>オイユ</sup>屋<sup>ヤ</sup>アガツトクレヤス。

〔光〕優しく言う場合の表現である。このように過去形で労をねぎらう形の表現は、訪問者を送る時に用いられることもある

用語の待過度がほぼ同じである場合、長く表現されることによって、あいさつ表現としての丁寧度が増す。

ここで、迎える側の対応についてももう少し触れておく。早ければ①の類の応答の直後に、訪問者を奥へ招き入れた  
 り玄関のかまちの所に座布団をすすめたりするあいさつ表現が入る。

○ 端<sup>ハシ</sup>近<sup>シカ</sup>ドスケド(オ掛<sup>カ</sup>ケヤシトクレヤス)。

○ ドーゾオアガリヤシトクレヤス。

〔光〕「マーアガットクレヤスナ」とも言う

○ ムサクロシ  
〔オス〕  
〔ケド〕  
〔ケレド〕  
ドーゾオアガリヤシトクレヤス。

尚、次の表現は、家に招き入れる意でも用いられるが、奥へ通した客が帰ろうとするのを引きとめる意でも用いられる。

○ 何モゴザイマセンケド、オ茶漬ケナト。  
〔ナシニ〕

〔光〕  
〔何モ〕  
〔何モ〕  
オヘンケド、オ茶漬ケナト（食べテイトクレヤスナ）とも言う

このようにすすめられても、訪問者はすぐにその言に従ってはならない。先にも述べたように、訪問者が家のどこで接待されるかは、既にあいさつの様式に含まれる事柄である。訪問者は、相手の好意のあいさつ表現に対して、自らの対応を社会常識にのっとって選ばなければならない。相手に接待のための気を遣わせないように、訪問者の側が予め、「チョットソコマデ序ガアリマシタノデ」と改まった訪問でないことを告げる表現がある程度の通則性を有する社会である。一方、迎える側は、相手によってはこの種のあいさつ表現を略して対応する。以上、迎える側の対応について付け加えた。

## ②「コンバンワ」の類

②は、訪問の時刻に関わるあいさつの表現の類である。

—朝の表現—

○ オハヨー。

- オハヨーサン。
- オヨーサンドス。
- オハヨーゴザイマス。

―昼の表現―

- コンニチワ。

〔説明〕「コンニチワ」は、①の類にも②の類にも使用する。

―夕方以降の表現―

- コンバンワ。
- コンバンワ、モーオヤスマヤシタンドスカ。
- 〔Ⓞ〕特に用事があつて行った時等に、こう言う。

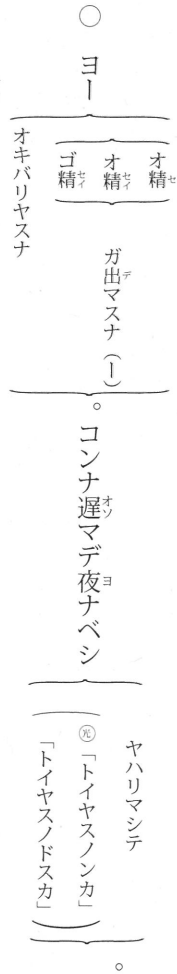
- オシマイヤス。
- オキバリヤス。

〔説明〕「オシマイヤス」「オキバリヤス」の両形は、他家訪問の際に限らず、夕方人に出会った時や他家からの辞去の際にも、用いる。

〔Ⓞ〕「オシマイヤス」は、労働している人等に対して言う。

これらの表現に付け加えるか又は代わるものとして、訪問の時刻に関わる次のような表現がある。

- 朝早くカラ  
夜遅クニ  
オ食事ドキニ  
(ゴ) 時分ドキニ  
(エライ) オ邪魔シマシテ、スミマセン。
- エライ遅ー参リマシテ、カンニンシトクレヤス。



- オ疲レヤス。
- オ疲レサンドス。
- × シツポリドス。

「説明」 あまり使わない。「オ精ガ出マス」と同じ意の表現である」

③ 「アツオスナー」の類

③ は、時候に関わるあいさつ表現の類である。この種の表現は日本語の一つの特色になっており、京言葉においても欠かせないものである。

まず、よく現われる表現形として、その日・その時節の天候に言及する形がある。

○ 毎日降<sup>フ</sup>「ラハリ」マスナー。

〔<sup>光</sup>自分達も、こういう「ハル」の使い方をする〕

○ 毎日鬱陶<sup>ウツト</sup>シオスナー。

○ エーオ湿<sup>シメ</sup>リドスナー。

○ 今日モ御降<sup>オサガ</sup>リドス。

〔説明「御降<sup>オサガ</sup>リ」は、「雨」の意である〕

説明としては、「御降<sup>オサガ</sup>リ」について右のように聞いているが、俳諧季語では正月三ヶ日の雨や雪のことを指す。

○ エーオ天<sup>テン</sup>気<sup>キ</sup>(サン)ドスナー。

○ 今日<sup>キョー</sup>ワヨイオ天<sup>テン</sup>気<sup>キ</sup>サンドス。

○ ヨロシーオ天<sup>テン</sup>気<sup>キ</sup>サンデゴザイマス。

× カンカン照<sup>テ</sup>リ<sup>カ</sup>デ叶<sup>カ</sup>イマヘンナー。

〔<sup>光</sup>こう言<sup>コト</sup>う〕

天候にも「サン」「ハル」を用いて自分の物言いを柔らげることが、明らかに一つの特徴的な表現法だと言える。日常会話でも、「オ日<sup>ヒ</sup>サンガ当<sup>ア</sup>タツテハツテ…」等と言う。

時候に関して、他に、気温に言及する形がある。友定賢治氏「彦岐島方言のあいさつことばとその敬讓法」(『文教国文学』一〇号・一九八一年六月)によると、時節天候に関するあいさつ表現は、春・秋より夏・冬の方が豊富に集められたという。京都の場合にも、収集した表現例からはその傾向を指摘できそうである。盆地型の気候で、寒暑が厳しいことによるものであるだろうか。

○ 暑<sup>アツ</sup>オスナー。

○ オ暑イコトドスナー。

○ (エライ) オ暑ーナリマシタナー。

○ (寒<sup>ワ</sup>寒<sup>マ</sup>) オスナー。

○ ジワジワト寒<sup>サ</sup>オスナー。

○ (エライ) オ寒ーナリマシタナー。

〔<sup>光</sup>秋に「スズリシマスナー」と言う人もある。きれいな言葉である。春に「温<sup>ヌク</sup>ナツテキマシタ」と言う〕  
他に、日照時間の長短は生活実感と関わりが深く、よく話題にのぼる。

○ 早<sup>ハ</sup>夜<sup>ヨ</sup>ガ明<sup>ア</sup>ケルヨーニナリマシタナー。

○ ジキニ暗<sup>ク</sup>ナリマスナー。

○ 此<sup>コノ</sup>頃<sup>トキ</sup>ジキ暗<sup>ク</sup>ナツテキヤハリマスナー。

○ ジキニ日<sup>ヒ</sup>ガ暮<sup>ク</sup>レハリマスエナー。

○ ダイブン日<sup>ヒ</sup>ガ短<sup>ミ</sup>シヨナリマシタノデ、忙<sup>セワ</sup>シーナリマシタナー。

以上が、時候のあいさつ表現の類である。

④ 「ゴブサタシテマス」の類

④は、初対面であるか知己ならば最近の両者のつきあいはどうであるか、そういうことが話題になるあいさつ表現の類である。

初対面のあいさつ表現は、次の通りである。

○ ハジメ(マシ)テ、オメモジイタシマス。



最近つきあいがある場合は、世話になっていることに対して礼を述べる形がある。

- イツモオーキニ。
- イツモオ世話サンドス。
- イツモオ世話ニナツテオリマス。
- イツモアリガトーゴザイマス。

座談会「あいさつ・身体・空間」(『言語』一〇巻四号・既出)において、鈴木孝夫氏が次のように発言している。

…もう一つわたしはこれは、もしかしたら日本に固有じゃないかというぐらいに思っているのは、過去において共有した体験を蒸し返すことが挨拶になることね。例えば「この前はどうも……」というふうな、過去の体験に言及することが現在の挨拶になるといえるのは、割合ヨーロッパなんか少ないんですよ。

鈴木氏の発言にもあるように、過去に礼を述べたり謝ったりした事柄等に再び言及する表現がある。④の類として扱う。

- 此間ワ、オーキニ。
  - 先日ワ、ドーモアリガトーゴザイマシタ。
  - 先日ワ、御無礼イタシマシタ。
- これらのあいさつ表現に対して、受ける側は、次のように答える。
- ドーイタシマシテ (滅相ナコト)。
- つきあいが途絶えていた時には、無沙汰を詫びる表現が一般的である。
- 「ナガラク」御無沙汰シテマス。
  - 「ナガイコト」御無沙汰イタシテオリマス。

○ 御無沙汰シテマス。オ久シブリドスナ。御無沙汰シテマス。オ久シブリドスナ。

○ 本<sup>ホ</sup>当<sup>ト</sup>ニ<sup>ナ</sup>ナ<sup>ガ</sup>イ<sup>コ</sup>ト<sup>ト</sup> 御無沙汰<sup>ゴフサタ</sup> 申<sup>マ</sup>シ<sup>テ</sup> 申<sup>マ</sup>シ<sup>テ</sup> 謝<sup>ア</sup>リ<sup>マ</sup>セ<sup>ン</sup>デ<sup>シ</sup>タ。マシテ申シ訳アリマセンデシタ。

迎<sup>ムカ</sup>える側<sup>ガ</sup>は、似<sup>ニ</sup>た<sup>ヨ</sup>う<sup>ナ</sup>な<sup>表</sup>現<sup>ヒ</sup>で<sup>応</sup>じ<sup>ル</sup>。

○ (本<sup>ホ</sup>当<sup>ト</sup>ニ) (オ) 久<sup>キ</sup>シ<sup>ブ</sup>リ<sup>ド</sup>ス<sup>ナ</sup> (一)。

〔先<sup>サキ</sup>丁<sup>テイ</sup>寧<sup>ネイ</sup>になると、「ドス」の代わりに「デゴザイマス」を用いる〕

○ アン<sup>ア</sup>ン<sup>タ</sup>サ<sup>ン</sup>、近<sup>チカ</sup>頃<sup>キ</sup> チョ<sup>チ</sup>ョ<sup>ツ</sup>ト<sup>モ</sup> オ<sup>オ</sup>目<sup>メ</sup>ニ<sup>ニ</sup>カ<sup>カ</sup>リ<sup>リ</sup>マ<sup>マ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>タ<sup>ナ</sup>。オ目ニカカリマヘンドシタナ。

○ マ<sup>マ</sup>ー<sup>マ</sup>ー<sup>マ</sup>ホ<sup>ホ</sup>ン<sup>ン</sup>マ<sup>マ</sup>ニ<sup>ニ</sup>ナ<sup>ナ</sup>ガ<sup>ガ</sup>イ<sup>イ</sup>コ<sup>コ</sup>ト<sup>ト</sup>会<sup>ア</sup>イ<sup>イ</sup>マ<sup>マ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>タ<sup>ナ</sup>。コ<sup>コ</sup>チ<sup>チ</sup>ラ<sup>ラ</sup>モ<sup>モ</sup>御<sup>ゴ</sup>無<sup>フ</sup>沙<sup>サ</sup>汰<sup>タ</sup>ニ<sup>ニ</sup> マシテ、申<sup>マ</sup>シ<sup>テ</sup> 謝<sup>ア</sup>リ<sup>マ</sup>セ<sup>ン</sup>オ<sup>オ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>タ。

この応対時、健康状態その他に変わりがなくどうかを尋ねるあいさつ表現が双方からなされる。

○ ドー<sup>ド</sup>デ<sup>デ</sup>シ<sup>シ</sup>タ<sup>ン</sup>エ。

○ ド<sup>ド</sup>ナ<sup>ナ</sup>イ<sup>イ</sup>ド<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>タ<sup>ン</sup>エ。

○ ドー<sup>ド</sup> オ<sup>オ</sup>シ<sup>シ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>シ<sup>シ</sup> タ<sup>タ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス。

○ ド<sup>ド</sup>ナ<sup>ナ</sup>イ<sup>イ</sup>シ<sup>シ</sup>ト<sup>ト</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>シ<sup>シ</sup>タ<sup>タ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス<sup>ス</sup>。

○ ドー<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>タ<sup>タ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス。案<sup>ア</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>タ<sup>タ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス<sup>ス</sup>エ。

○ ソ<sup>ソ</sup>ノ<sup>ノ</sup>後<sup>ゴ</sup>ワ、ドー<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>ト<sup>ト</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>ス。御<sup>ゴ</sup>機<sup>キ</sup>嫌<sup>ケン</sup>オ<sup>オ</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>ロ<sup>ロ</sup>シ<sup>シ</sup>オ<sup>オ</sup>ス<sup>ス</sup>カ。

○ オ<sup>オ</sup>変<sup>カ</sup>ワ<sup>ワ</sup>リ<sup>リ</sup> ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup> マ<sup>マ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ン</sup>カ。

○ 皆<sup>ミ</sup>様<sup>ナ</sup>オ<sup>オ</sup>カ<sup>カ</sup>ワ<sup>ワ</sup>リ<sup>リ</sup>ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>マ<sup>マ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス<sup>ス</sup>カ。…ソ<sup>ソ</sup>ラ<sup>ラ</sup>結<sup>ケ</sup>構<sup>コ</sup>ド<sup>ド</sup>シ<sup>シ</sup>タ<sup>タ</sup>ナ。

○ 皆<sup>ミ</sup>サ<sup>サ</sup>ン<sup>ン</sup>オ<sup>オ</sup>変<sup>カ</sup>ワ<sup>ワ</sup>リ<sup>リ</sup>ア<sup>ア</sup>リ<sup>リ</sup>マ<sup>マ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス<sup>ス</sup>カ。

○ 御<sup>ゴ</sup>機<sup>キ</sup>嫌<sup>ケン</sup>サ<sup>サ</sup>ン<sup>ン</sup>ド<sup>ド</sup>ス<sup>ス</sup>カ。風<sup>カ</sup>邪<sup>ゼ</sup>ヒ<sup>ヒ</sup>イ<sup>イ</sup>ト<sup>ト</sup>イ<sup>イ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>シ<sup>シ</sup>マ<sup>マ</sup>ヘ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ン</sup>カ。

〔光〕「御機嫌サントスカ」とは言わず、「御機嫌ヨロシオスカ」と言う。相手が風邪気味の時等、「モー ドーモ オヘンカ」と尋ねる」

相手が健康だと分かっている場合、次のような表現がある。

○ 御機嫌サントス。

相手が健康を害していることが分かっている場合には、次のような表現がある。

○ オ塩梅ドードスエ。

○ モーオ塩梅ヨロシオスカ。

○ 近頃オ塩梅ドナイドス。ヨロシオスカ。(オ) 大事ニシトクレヤスヤ。

〔光〕「オ塩梅」は「オ加減」とも言う」

○ ドードス。大事ニシテオクレヤスヤ。

〔光〕「ドードス」とは言わず、「オ加減悪イノ聞イテマシタンスケレド、  
〔下ナイ〕 オシヤシタンドス」と言う。続

いて「オ大事ニ  
〔シテオクレ  
〔シトクレ〕 ヤスヤ」と言う」

着物を着かえて改まって訪問する時には、総じてこの④の類の表現が長くなるという。

尚、商人同士の応対では、「ドードス」に対して、「マーマーデス」「マー  
〔ボチボチ  
〔ボツボツ〕 デス」等の表現が聞かれる。

⑤ 用件に関わる「あいさつ表現」の類

⑤は、用件に関わるあいさつ表現の類である。まず、所用による来訪であることを告げる表現がある。

○ 抛所ナイ急ナ用事デ参上イタシマシタ。

〔光〕「参上イタシマシタ」の部分で、「寄セテイタダイタンドス」とも言う」

日常的な用件の場合、この前置きなしに以下の表現に入る。  
先述したように、冠婚葬祭に関わる定型化したものの取り扱いは、別の機会に譲る。

―物品の授受に伴う表現―

隣近所同士、物品のやりとりが日常的に行われた。その物品は、年中行事に関わるもの・家で作ったもの・貰い物の一部等である。

○ コレワ、オ茶ノ子<sup>チヤ</sup>ドス。

○ コレワ、オ粗末<sup>ソマツ</sup>ドスケド、オ茶ノ子<sup>チヤ</sup>ノシルシドス。

〔説明〕「オ茶ノ子<sup>チヤ</sup>」として、模造紙に砂糖<sup>サンボンゴ</sup>（三盆白）あるいは素麵<sup>ソウメン</sup>・芥子漬<sup>カラシヅケ</sup>等を包んだものを、お彼岸の時、親類に配る。

〔光〕「茶ノ子<sup>チヤ</sup>」は、法事の引き出物。親類に配る。お彼岸には、「オハギ」を、向かい三軒両隣りと親類とに配った」  
○ コレオ下ガリドス。

〔説明〕「神様<sup>カミサン</sup>」のお供えのお下がりを配った。「押シ物<sup>オシモノ</sup>」の菓子が多かった」

〔光〕菓子はだいたい「白雪糕<sup>ハクセウコ</sup>」だった」

「押シ物<sup>オシモノ</sup>」は、「決まりきった物」の意である。

○ これ

不加減<sup>フカゲン</sup>ナ  
モムナイ  
モミナイ  
ザンナイ

モンドスケド、

〔オアガリヤシテオクレ  
メシアガットクレ〕

ヤス。

〔説明〕「家<sup>ウチ</sup>デ煮イタ物<sup>モノ</sup>」等を「ゴ近所<sup>ゴキンジョ</sup>」に配ることがよくあった。その時に、このような表現をした。「ザンナイ」

は「味ない」「つまらない」の意」

〔光〕「不加減ナ」は言う。「ザツトシタ」とも言う。「モミナイ」は言わないが、聞いたことがある。「ザンナイ」は言わないが、人によつては聞いたことがある」

「ザンナイ」を「味ない」という意で用いるのは、通用範囲が狭い用法と思われる(別の調査で、性向語彙であるという指摘があった)。食物に関しては、「ホンノオ口汚シドスケド」という表現もある。

その他、物を持つていくのに次のように言う。

○ コレ

アリアワセ物<sup>モト</sup>ドス  
シヨモナイ物<sup>モト</sup>ドス  
アラケナイ物<sup>モト</sup>デゴザイマス

ケド、ドーズ オ納<sup>オサ</sup>メヤシトク<sup>ク</sup>レヤス。

○ スミマヘンケド、シヨモナイ物<sup>モト</sup>オコソオ愛想<sup>アイソウ</sup>ドスケド取<sup>ト</sup>ツイトク<sup>ク</sup>レヤス。

〔光〕物品を謙遜する部分の表現として、「ツマラン物<sup>モト</sup>ドスケド」とも言うし、枝つきの柿などの場合は、「荒<sup>アラ</sup>々<sup>ラ</sup>シ<sup>シ</sup>物<sup>モト</sup>ドスケド」とも言う」

貰い物を分ける場合、次のような表現がある。

○ コレ到来物<sup>トライモン</sup>ドスケド、御裾<sup>オスワ</sup>分けイタシマス。

○ 貰<sup>モウ</sup>イ物<sup>モノ</sup>ドスケド、御裾<sup>オスワ</sup>分けサセテイタダキマス。

○ コレ貰<sup>モウ</sup>イ物<sup>モノ</sup>ドスケド、チョット御裾<sup>オスワ</sup>分け申<sup>モウ</sup>シマスノデ、ドーズオ納<sup>オサ</sup>メヤシトク<sup>ク</sup>レヤス。

物品を受け取る側は、これらのあいさつ表現に次のように応じる。

○ へー、オオキニ。

○ オオキニ、ハバカリサン。

○ ハバカリサン。

〔光〕「ハバカリサン」は、用事を人にもたらしたりした時に言うが、物品を買った時には言わない]

○ オ廉カネノ多ナゴザイマスノニ。

○ ソンナラ辞儀無シシギニ頂戴シマス。チヨウダイ

〔光〕「辞儀」に「オ」をつけることもある]

○ 御丁寧ゴテイナーニ。

○ 恐オソシ入りマス。

少し間をおいての場合は、次の表現等がある。

○ 先程サキホトワ、ドーモアリガトゴザイマシタ。

— 謝礼の表現 —

次に、謝礼のあいさつ表現について考える。先述した通り過去の事柄に関して再度礼を述べる習慣があるが、その場合のあいさつ表現は、④の類に入れる。しかし、それ自体を訪問の主な用件とした謝礼のあいさつ表現は、この類に入れる。表現例を挙げる。

○ 先昨日ワ、ドーモアリガトゴザイマシタ。

〔説明〕「此間コノアイダワ、オーキニ」は敬意が低いので、用件に関わるものとしては省く]

〔光〕これほどに整つては、言わない。「オーキニ、アリガトサンドシタ」等と言う]

陳謝の表現

この類で、それ自体を訪問の主な用件とした陳謝のあいさつ表現を扱う。

○ 先日ワ、御無礼イタシマシタ。

○ アノ時ワ取り込デマシタノンドツサカイ、  
堪忍 堪忍 シトクリヤツシヤ。

〔光〕次のように言う。「アノ時ワ取り込デマシタ  
サカイ、堪忍」

エ  
シテヤ  
ドッセ  
シトクレヤツシヤ  
 一

○ 鈍ナ事シマシテスミマヘン。堪忍シトクレヤスヤ。

○ 二度ト モー決シテシヤシマヘンサカイ、堪忍シトクレヤス。

〔光〕「決シテ」は、おかしい。「二度トコンナ事セーシマヘンサカイ、堪忍シトクレヤス」等と言う

子供のことに関して、親などが謝りに行く場合がある。

○ キツト叱ツトキマスサカイ、堪忍シテヤツテオクレヤス。

○ アノ子ワ、ナニブン不調法ナ子ドスサカイ、ドーズ堪忍シテヤツテオクレヤス。

〔光〕「ナニブン」「不調法ナ」「ドーズ」は、おかしい。次のように言う。「何シヨ、鈍な子ドスサカイ(二)」、

堪忍シテヤツテ  
オクレーヤス

その他、敬意のあまり高くない表現があるが、陳謝を主な用件とする場面では出にくい形と考えられる。

○ 堪忍 エ  
ドッセ  
ドスエ。

○ 堪忍<sup>カンニン</sup>シテ。

○ 堪忍<sup>カニン</sup>シテヤ。

○ 〔光〕「堪忍<sup>カンニン</sup>シテヤ」とも言う

○ スンマヘン（ドシタ）。

陳謝の表現に対して、次のように答える。

○ ドーイタシマシテ。

尚、謝礼や陳謝のためによく他家を訪問したかという筆者の質問に対して、「事と次第による」という答えが返った。

— 火災見舞い等の表現 —

他家に火事等急な災難があった時、お見舞いという形で、「あいさつ」に出向くことがある。事の緊急性に応じて、前段の時候のあいさつ表現等が省略又は簡略化されるものと、推測できる。

○ エライ事<sup>コト</sup>ニナリマシタンドスナー。

○ エライ事<sup>コト</sup>ドシタナー。ドーモオヘンドシタカ。心配<sup>シンバイ</sup>シテマシタンドツセ。

〔光〕次のように言う。「エライ事<sup>コト</sup>ドシタナー。」

ドーモ  
何<sup>ナニ</sup>トモ  
オヘンドシタカ  
オヘナンダカ

ドードシタン

心配<sup>シンバイ</sup>シテマシタンドツセ

— 依頼の表現 —

どうしてもしてほしい事でも、遠慮した表現で依頼する形が一般的である。

○ 〔オ序<sup>ツデ</sup>オ手<sup>テ</sup>隙<sup>キ</sup>〕ノ時<sup>トキ</sup>、ヨロシクオ願<sup>ネガ</sup>イ申<sup>マ</sup>シマス。



〔光〕「ヨロシク」はおかしい。「ヨロシユ」<sup>キ</sup>と言う

○ オ序ガオシタラ、ヨロシクオ願イ申シマス。

〔光〕次のように言う。「オ序ガ」<sup>キ</sup>「オシ」<sup>キ</sup>「ゴザイマス」タラ、ヨロシユオ願イ申シマス

次の表現はぞんざいであり、この類としては適さない。

○ アンジヨーシテヤ。

―返却の表現―

借りた物品の返却の際のあいさつ表現としては、次のように言う。

○ オ大事サンノ物ナガラクオ借リイタシマシテ、  
〔アリガトサンジマス〕  
〔アリガトサンドス〕。

それに対しての応答として、次のように言う。

○ 御緊当サンドス。

漢字緊当は、金当とも。義理がたい意。

―出産祝いの表現―

出産祝いとしては、次のようなあいさつ表現をする。

○ オヨロコビヤス。

―年始の表現―

年中行事に関わるあいさつ表現の一つとして、新年の表現がある。

○ (新年) 明ケマシテオメデトー存ジマス。  
アイカ 相変ワリマセズ、ヨロシユーオ願イシマス。  
旧年 ワ色々オ世話ニナリマシテ、アリガトーゴザイマシタ。本年モ

「光」新年明ケマシテ」と重ねることはない。次のように言う。

「新年」明ケマシテ オメデトー存ジマス。  
旧年 ワ色々オ世話ニナリマシテ、アリガトーゴザイマス。  
冬年 ワリマセズ、ヨロシユーオ願イシマス」  
今年 モ相変

―年の暮れの表現―

一二月一三日の事始めの日、宿入りしている人が母屋に「あいさつ」に行くことになっている。

○ 押シツマリマシテ、オ事多サン  
ドス デゴザイマス。

○ 押シツマリマシテ、何トノー  
忙シ事ドスナー オ忙シーゴザイマスナ。

○ エライ押シツマリマシテ、オ忙シー事ドス。

以上で、⑤の用件に関わるあいさつ表現の類の記述を終える。ここにおいては社会的にある程度通則性を有する表現例を挙げているのであって、実際の場面においてはこれらの表現を骨子としてもっと具体的な話題に肉付けされた会話となって実現すること、論を待たない。

⑥ 「オジャマイタシマシタ」の類

⑥の類は、帰る意志を告げるあいさつ表現である。食事の接待の場合を含めて、相手に手間をかけたことを詫げる

形が一般的である。

○ オ喧ッサン (ドシタ)。

「説明」もつとも一般的な言い方で、親しい者同士の間柄で用いる」

○ 長居イタシマシタ。

○ オ邪魔イタシマシタ。

○ 本当ニ突然参リマシテ、御馳走サンデ申シ訳ゴザイマセン。

〔光〕「ホンマニ急ニ」〔来〕「マシテ、御馳走サン」〔下シタ〕「デゴザイマシタ」。スンマヘンドシタ」

○ スンマヘンケド、オ呼バレ立チイタシマス。

「説明」御馳走になつてすぐに帰ることを、「ヨバレダチ」と言う」

○ 去ニマツサ。

食事どきにかかつて帰ろうとする客を引きとめる表現として、食事をすすめる形がある。先述したが次のような表現である。

○ 何モゴザイマセンケド、オ茶漬ケナト。

それに対する断りの表現としては、次の言い方等がある。

○ コノ次、呼バレマツサ。

辞去を告げる場合、子供同士だと、次のように言う。

○ モー、去ンデクルワ。

送る側のあいさつ表現としては、接待の行き届かないことを詫びる形が一般的である。

○ エライオ愛想無シデ。

○ オ構イモシマセンデ。

〔光〕「オ愛想無シンドシタネ」とも言う

⑦ 「サイナラ」の類

⑦の類は、別れぎわのあいさつ表現である。

― 帰る側の表現 ―

○ サイナラ。

〔説明〕 親しい仲で用いる

○ オ先ゴメンヤス。

〔説明〕 居残る同席の人に対して用いる

〔光〕「ホナ」サイナラ、ゴメンヤス」「オヤスミヤス」とも言う。同席の人からは、「ドーゾゴユツクリサシテモ  
ロトークレヤス」と返す

○ オシマイヤス。

○ オキバリヤシトクレヤツシヤ。

〔説明〕 「オシマイヤス」「オキバリヤシトクレヤツシヤ」共に、晩ごはんの後に他家を訪問した時のあいさつ表現  
であり、他家を辞去する際にも用いる

― 送る側の表現 ―

○ オシズカニ。

〔光〕「オシズカニ、ドーズ」とも言う

○ オ足元、オ気オツケテ。

○ ゴ機嫌ヨー。

〔光〕「ゴキゲンヨー」は、新しい言い方であろう。商人同士の別れの際には、「マーオキバリヤス、サイナラ」とも言う

送る側は、この時に、相手の訪問に対して礼を述べたりする。又、再度の訪問を望む形で、次のような表現を加えることもある。

○ チヨコチヨコ、オイデヤスヤ。

〔光〕「オ暇デシタラ、マタオ遊ビニ来ト(一)クレヤス」とも言う

○ マタドーズオ近イウチニ。

〔説明〕水商売で聞かれる用語である

帰る側は、自分の家への来訪を相手に望むあいさつ表現をすることがある。

○ 遊ビニ来ト(一)クレヤス。

○ オ暇デシタラ、一遍オ話ニ来ト(一)クレヤス。

○ ムサクロシオスケド、

オ手ガアキマシタラ	オ暇デシタラ	オ序ガアリマシタラ	オ序ノ	節ヲ	(時ニ)	オ手隙ノ時ニデモ
-----------	--------	-----------	-----	----	------	----------

オ越シ	御足勞	願エマン	ヤロカ	デシヨーカー
-----	-----	------	-----	--------

○ オ越シヤシトクレヤス

(俵デオ迎イニ参リマスサカイ)。

「<sup>光</sup>相手の来訪を本当に希望している場合にでも、「オ手ガアキマシタラ」と「オ愛想<sup>アイソウ</sup>」を言う。「クルマ」云々はどうしても来てほしい時に、「お医者さん」に対してぐらいに言うが、「お医者さん」は、家紋のついた人力車を持っていた。来てほしい気持ちを相手に強く伝えたい時には、これほどまわりくどく言わない。「チョット○○○○」に寄ッテオクレヤスナ」等、もっと内容が具体的になる」

子供同士、又は子供に対して大人が言う場合、次のような誘い方になる。

- アボシニ <sup>オイナイ</sup>キトクレヤス。 「アボスル」は「遊ぶ」の意。
- 双方から次の出合いを誘う言い方をして別れることもある。
- 一杯ツキアイマヘンカ。
- ドコゾオイシーモン食ベニ行キマヒヨカ。
- ○○○ヘオ行キヤシマヘンカ。

紙数をさいだが、以上が他家訪問の際のあいさつ表現である。

## (三) 京言葉における他処での出会いの際のあいさつ表現

これまで、家を中心として、町家の人々のあいさつ表現を考えてきた。双方の家を離れた他処での出会いにおいても、(二)で扱った幾つかの類のあいさつ表現が交換されるが、記述の重複を避け、他処での出会いにおける典型的な表現だけを、補足的に取り上げておく。

家の近辺で出かける人に出会うと、「どこへ行くのか」と尋ねるのが通則的である。具体的な答えは、求められていないのである。

○ ドコ行キヤ。

○ ドコ行キドス(ノエ)。

○ ドコ〔イ〕〔光エ〕

○ ドチラエオ越シヤスノドスエ。

〔光〕「ドコ行クネ」「ドコ行カハン」〔ネ〕「ドツチオ行キヤスノ」等とも言う。答えとしては、「チョット」「チョットソコマデ」等である。

又、出会い方を云々することがある。

○ 久シユオ目ニカカリマヘンドシタナ。オ塩梅デモオ悪オシタント違イマスカ。

○ 〔エライオ珍シ〕所アオ目ニカカリマシタナ。

出会った人を見知つていながら誰か思い出せない時の「あいさつ表現」は、次の通りである。

○ エライ御見逸レシマシテ、堪忍シトクレ〔ヤッシャ〕。

○ 御見逸<sup>オミソツ</sup>レ申<sup>モウ</sup>シ<sup>マシタ</sup> マス<sup>ミス</sup> ガ、ドナタハンドシタンヤナー。

〔光〕少し違う。「御見逸<sup>オミソツ</sup>レシマシタガ、ドナタハンドシタヤロナー」と言う」

○ ヒヨ<sup>コトキ</sup>ンナ事<sup>コトキ</sup>申<sup>モウ</sup>シマスガ、モシアンタハン〇〇サント違<sup>チガ</sup>イマスカ。

〔光〕「ヒヨ<sup>コトキ</sup>ンナ事<sup>コトキ</sup>申<sup>モウ</sup>シマスガ」のところを、そうは言わず、

「ヒヨ<sup>コトキ</sup>ンナ事<sup>コトキ</sup>」  
オ聞<sup>キ</sup>キシマス  
言<sup>イ</sup>イマスケドモ  
ケ<sup>ガ</sup>ンド  
「と言う」

○ 出会うまでに相手を待たせた時の劳いの表現は、次の通りである。

○ オ待<sup>マツ</sup>遠<sup>ト</sup>サン。

寺社内で人に出会った時のあいさつ表現としては、次の通りである。

○ ヨーオ参<sup>マウ</sup>リヤス。

〔説明〕参拝客に対して、「オ寺<sup>テラ</sup>サン」が言う」

〔光〕参拝客同士でも、言う」

○ オ受<sup>ウケ</sup>ケガ多<sup>オ</sup>オシタカ。

〔説明〕参拝客同士が言う。あいさつ表現というほどには定着していない」

〔光〕「オ受<sup>ウケ</sup>ケガ<sup>アル</sup>チイ」と言う言い回しはあるが、参拝客同士のあいさつ表現としては用いない」



## (四) 京言葉におけるあいさつ表現の特色

先に紙数をさいて述べたように、あいさつ表現自体は勿論、京言葉に特有のものではない。しかし、京言葉で語られているということが、本稿で紹介してきたあいさつ表現の一つの性格づけになっているのは確かである。まず、「語選び」について考える。第一部第二章に関連の記述があるが、「オ：ヤス」「ハル」「ドス」の待遇価値は、さして高くない。特に「ハル」に関しては、「毎日降ラハル」「ジキ暗ナツテキヤハル」(二音節語にヤハルがつく)のように時候の表現にまで用いることが特徴的である。同じく、「オ」「サン」の用い方にも特色がある。「オ」の多用が目立つのは勿論のこととして、「オ大事サン」「オヤカマツサン」「オ天気サン」等の「オ：サン」は、話し手・聞き手に関わりなく種々の語について、特有の表現効果を上げている。これらの「語選び」の効果は、取り立てて相手を高める語を用いなくとも、種々の語をむき出しに言うのを避けることによって、表現を柔らかく品位のあるものにしていく点にある。その他、「アリアワセ物」「シヨモナイ物」「アラケナイ物」等の謙遜のための「語選び」に特徴があり、現代におけるよりも豊富な使い分けを指摘しうる。

次に、「言い回し選び」について。実質の意味を形骸化したあいさつ表現のためのあいさつ表現を、社会が一つの常識的な約束事として育んできている。他地域のひとの意思疎通に齟齬をきたすことがあるのは、そのためである。「ドコ行キドス」という表現等であるが、この点については用例を足して少し詳しく考えておく。

断りの常套文句としてのあいさつ表現がある。言いくい内容であるため、そこに細かい配慮が現れる。訪問販売に対する断りの表現等である。

○ 結構ドス。

〔光〕「セツカクデスケド」をつける。「二見<sup>イチケン</sup>」の時はそのまま断るが、義理がある人に対しては、「マー、考エトキマッサ」<sup>マッサ</sup>と答える」

他にも、社会的に断り文句と了解されている幾つかの表現がある。

- 家<sup>ウチ</sup>ニ有<sup>ア</sup>リマス。
- 只<sup>ただ</sup>今<sup>イマ</sup>足<sup>タ</sup>リテマス。
- 手<sup>テ</sup>ガハナセマセン<sup>ン</sup>ノデ。
- 〔光〕「手<sup>テ</sup>ガハナセシマヘン<sup>ン</sup>ノデ」とも言う」
- 出<sup>デ</sup>掛<sup>カ</sup>ケマス<sup>ノ</sup>デ（又<sup>また</sup>後<sup>アト</sup>カラニシトク<sup>ク</sup>レヤス）。
- 〔光〕「コ<sup>コ</sup>レカラ出<sup>デ</sup>掛<sup>カ</sup>ケ<sup>ケ</sup>」<sup>マッサカイ</sup>「マス<sup>ノ</sup>デ」<sup>カシガ</sup>とも言う」
- 考<sup>カシガ</sup>エトキマス。
- 考<sup>カシガ</sup>エサシテオク<sup>ク</sup>レヤス。
- 一<sup>イチ</sup>遍<sup>ヘン</sup>家<sup>イェ</sup>ノ者<sup>モノ</sup>ニ聞<sup>キ</sup>トキマス。
- ソノ日<sup>ヒト</sup>ワ、人<sup>ヒト</sup>ト約<sup>ヤク</sup>東<sup>トウ</sup>ガア<sup>ア</sup>リマス<sup>サ</sup>カイ。

よく取り沙汰される京都人の物言いの歯切れの悪さは、京都人によると、「万事ウチラ（ひかえめ・うちうち）二物言<sup>ユ</sup>コトオ、京都人ワ美德ニシテイマス」ということになる。あいさつ表現の「言い回し選<sup>セン</sup>び」にも、その気持が生きているのである。次に商取引の応対の例を挙げておく。

内容自体は大変実質的なことであるが、相手の身に沿った表現の仕方となっている。

（客） コレ、ナンボ（いくら）ドス。

（客） キバットーキ（まけておき）ヤスナ。

(商人) オマケサンシトキマスワ。

あいさつ表現については、引き続き論考をなしていく。

(註一) 比較検討

「近世後期上方語」の論考を成すにあたっては、江戸語との比較を手懸かりとした。本稿においては、諸方言に關して先学から多く学びつつ、敢えて、京言葉の体系内だけで特色を追っていく手法を採った。

(註二) [光]

一九八四年三月一二日・四月九日の両日を調査日として、『源氏物語』の研究会である「光葉会」のメンバー四人にお願いした。当時七〇代の女性である。あくまでも参考のためである。

従来の被調査者における調査の結果をまとめ、「あいさつ表現」を中心に検討してもらった。テープも用いた。

#### 参考文献

- 奥山益朗氏 『あいさつ語源辞典』(東京堂出版・一九七〇年)  
藤原与一氏 『方言学の方法』(大修館書店・一九七七年)  
神鳥武彦氏編 『日本語方言学—その課題と方法—』(東京堂出版・一九七九年)  
鈴木孝夫氏 『あいさつ論—あいさつの言語社会学的考察—』(『言語生活』196・一九六八年)  
西条 貞氏 『オーキニからオシズカニまで—あいさつことばの地域差—』(『言語生活』196・一九六八年)  
宮地伝三郎氏 『動物のあいさつ』(『言語生活』196・一九六八年)  
齋藤喜門氏 『あいさつの指導』(『言語生活』196・一九六八年)  
平尾美和子氏 「長崎県西彼杵郡琴海町尾戸郷小口方言に見られる日常的な挨拶表現について」(『国語と教育』第1号  
長崎大学国語国文学会・一九七六年)  
中村二口男氏 「奥尻島における挨拶表現」(『北海道奥尻島方言の研究』北海道教育大学旭川分校国語  
学研究室・一九七六年)  
佐藤虎男氏 「大阪船場のあいさつことば」(『学友国文』17 大阪教育大学国語国文・一九七三年)

- 「あいさつお国めぐり」1～12（『言語生活』349～355・358・359・361・363・365）
- 広島女学院大学方言研究会「共同調査報告」島根県仁多郡横田町の挨拶ことば」（『国語国文学』11号・一九八一年）
- 佐藤亮一氏編「わかれのあいさつ 北から南から」（『言語生活』363・一九八二年）
- 東山安子氏・ローラ・フォード氏共著「あいさつにおける言語行動と非言語行動の日米比較」（『言語』12月増刊号・一九八二年）
- 江端義夫氏「あいさつことばの方言地理学的研究」（『広島大学教育学部紀要 II部』・一九八三年）
- 野元菊雄氏「あいさつ言語の原理」（『日本語学』8―4・一九八五年）
- 沖 久雄氏「あいさつ言語行動分析の観点」（『日本語学』8―4・一九八五年）
- 真田信治氏「あいさつ言語と方言―地域と場面差―」（『日本語学』8―4・一九八五年）
- 田中 望氏「外国人の日本語行動―会話のオープンングストラテジー―」（『日本語学』8―4・一九八五年）
- 前田富祺氏「あいさつ言語の歴史」（『日本語学』8―4・一九八五年）
- 藤原与一氏「続昭和（↓平成）日本語方言の総合的研究 第三卷 あいさつことばの世界」（武蔵野書院・一九九二年）